教員インタビュー

京都大学公共政策大学院　奈良岡聰智（ならおかそうち）教授

経歴

―日本政治外交史に関心を持ったきっかけや背景があれば教えてください。

高校までは青森県青森市に住んでいました。田舎なので周りに研究者はいないし、研究のやり方もわからない。また、研究で生活ができるとも思っていなかったので、大学に入学するまでは、研究者というのはあまり想像していませんでした。1浪して京大の法学部に入ったんですけど、当初は外交官、あるいは国家公務員になろうと思っていました。1クラス50人くらい同級生がいて、ほとんどは法曹関係志望でしたね。同級生にロザンの宇治原くんがいて、彼だけは最初から芸人になるって言ってました（笑）

小さい頃から歴史が好きで、司馬遼太郎を愛読書にしたり、親や祖父母の戦争体験とかにも興味を持って話を聞いたりしてたんですけど、それが仕事になるとは思っていませんでした。

ところが、中西輝政[1]先生という有名な先生が総合人間学部にいて、その授業を受けていたんですけど、その授業がたいへん面白かったんです。日本外交を語る上で、日米関係から説き起こすような人が多かったし、今も多いと思うんですけど、中西先生はイギリスの視点から日本外交や東アジアの国際政治を論じるというスタイルを採っていて、それが新鮮だったんです。それを機に、日本の近現代史や現代の日本外交の問題を、世界史的に広い視野からしっかり勉強したいという関心が芽生えて、1回生や2回生の間はイギリス外交史や中国史の勉強を本格的にしていました。また、国家公務員志望の先輩に話を聞いてるうちに、霞ヶ関はブラックなので体力がないと務まらないと思うようになりました。僕は長く寝ないと知的な水準が保てない人間で、体力がないから無理だろうというのは正直ありました。それと、良い行政官というのは歴史意識や歴史の知識を持っていないと務まらないと思うんですけれど、歴史自体の研究と、その知識をもって行政に携わるというのは当然ながら違うということに気が付きました。それ以来、僕はどちらかというと行政官

（1）京都大学名誉教授。専門は国際政治学、国際関係史、文明史。著書に『大英帝国衰亡史』（毎日出版文化賞・山本七平賞受賞、ＰＨＰ研究所）、『日本人としてこれだけは知っておきたいこと』（ＰＨＰ新書）などがある。

よりもアカデミックな方に関心が深いし、もしかしたら向いているのではないかと思い始めて、2回生のときにはもう大学院志望を固めていました。

―ありがとうございます。中西先生以外に影響を受けた方はいらっしゃいますか。

僕の指導教授は伊藤之雄(2)先生だったんですが、いままで発見されていなかったり、しっかり読まれてなかったりした史料を読むとこんなことが見えてくるんだぞというのを授業でやっていて、それがとても新鮮でした。中西先生のもとで国際政治をやりたいという気持ちもあったんですが、外国史はハードルが高い気がしたんですよ。本当にイギリス人の考えていることがわかるのかと。長期間留学したり、たくさん外国語の文献を読みこんだり、イギリス社会に溶け込んで理解しないと本当のことは分からないのではないかと思いました。それに対して、たしかに百年前の偉い人のことを突き詰めるというのは大変なことではあるけれど、まだ日本のことのほうが自分にとっては分かるし、研究したら深い理解に到達できるのは日本史の方なのかなという感覚もありました。なので、中西先生からもすごく影響を受けたんですけれど、僕は自国史にすごく魅力を感じたんですね。日本の近代史から教訓を紡ぎ出していくことに僕は向いていると思ったし、そこに関心があったので、結局伊藤先生に指導教授をお願いしました。

専門

―現在はどのようなテーマで研究しているのですか。

二大政党制と第一次大戦を中心に研究を続けています。特に第一次大戦の研究については、日本がどう参戦したかという点や、対華二十一か条要求などを集中的に研究していたんですけど、今は大戦の後半のシベリア出兵やパリ講和会議について研究を進めています。特にパリ講和会議については、日本ではあまり注目されませんが、戦争終結後の普遍的な世界秩序をどうつくるかという点ですごく大きな問題で、当時の原敬などの政治指導者たちは悩みながら、国際秩序の中で日本がどう生きるべきか、新しい秩序づくりにどう参画するかを考えて、かなり的確な選択をしたと僕は評価しているんですね。国際秩序が変わっていく中で、日本の立ち位置をどう考えるのかというのは、現代でも重要な問題だと思います。というわけで、今はパリ講和会議を中心に研究していて、来年か再来年にはパリ講和会議と日本をテーマにしたブックレットを刊行する予定です。

―今後の研究の展望を教えてください。

あと20年経って第二次大戦の経験者がほとんどいなくなるまでの間に、第二次大戦の経験をどのように教訓化して将来に生かしていけるのか、そこに僕はすごく関心を持っています。20年後はちょうど僕が退官する年とほぼ一緒なんですけど、第二次大戦百周年でしっかり集大成できるようにやってい

(2) 京都大学名誉教授。専門は近・現代日本政治外交史。著書に『伊藤博文―近代日本を創った男』(講談社)、『元老―近代日本の真の指導者たち』(中央公論新社)などがある。

きたいと思っています。ヨーロッパは第一次大戦百周年の際に歴史和解を進めたという経験があるので、第二次大戦百周年でもその経験を活かせると思うんですけど、東アジアの場合はむしろ最近歴史問題が尖鋭化するばかりで、植民地の問題にしても戦争の問題にしてもあまり良い方向にはいかないかもしれないという予感がします。どこまでやれるかわからないですけど、せめて事実関係をしっかりと共有して、確かな事実をベースにお互い胸襟を開いてしっかり議論しようと提言するところまでは歴史研究者としてできると思うんですね。第二次大戦百周年の時に、日本と東アジア諸国、あるいは欧米のあいだの相互理解に貢献できるような研究をしたいと思っています。

—ありがとうございます。日本政治外交史の面白さや魅力はどこにあると思いますか。

歴史というのは、一人の巨人や英雄がいて動いていくというものではなくて、そこにはいろんな構造があり、思想の流れがあり、制度があります。とはいえそれらを実際に動かすのは人間ですから、歴史を研究することを通じて人間への理解が深まるというのが面白いところだと思います。政策決定者の苦悩や、ある政策ができるまでのせめぎ合いなど、トップリーダーであっても末端にいる人であっても、さまざまな人間の生き方や考え方が見えてくるというところがこの学問の魅力で、歴史研究を通して人の生き方を学ぶということも多分にあると思います。

担当講義

—公共政策大学院の授業とその特徴を教えてください。

公共政策大学院では日本政治外交という授業を受け持っています。歴史、過去のことを細かく追うというより、現状を理解するための歴史というか、現代の方にシフトした形で授業を行っています。

公共政策大学院の場合は半期の2単位の授業しかないので、できることは非常に限られているんですね。ここ数年やっているのは歴史認識問題か領土問題です。東アジアで領土問題とか歴史問題はものすごく尖鋭化していて、うちの大学院修了者は公務員ないし公的セクターで働く人が多いと思うんですけど、何らかのかたちで歴史問題に関わらざるを得ないという局面が仕事をしていく中であると思います。現状はものすごく尖鋭的で、イデオロギー対立が激しくなり、右の人が言っていることと左の人が言ってることが全然違って、何が事実かわからない状態になっていると思うんです。なので、そこを解きほぐして、考え方は色々あるだろうけど、ひとまず事実として考えられるのはこれで、解決策はこういう幅の中で考えるべきじゃないかというようなことを提示し、そのうえでみんなでディスカッションしてもらうというのを日本政治外交の授業では心がけています。

—先生の研究テーマである外交関係や歴史の分野で、省庁に対して提言されることもあると思いますが、もし公共の卒業生が国家公務員として当該分野に関係した省庁で働いている場合、何かアドバイスができることはありますか。

僕はそんなに経験はないんですが、国家安全保障会議（日本版NSC）という、首相とか防衛大臣とか安全保障関係の閣僚だけで集まって、国家安全保障を話し合う場所があります。その事務を担当してるのが、NSS（National Security Secretariat）[3]で、そ

この顧問を2年間やったことがあります。職員は外務省と防衛省、制服組の自衛官が一番多くて、その他は色んな官庁から来てるんですが、そこの会議に出させてもらった経験がありますね。安全保障関係の役所というのは人気があって、公共でも防衛省や外務省志望の人は多めだと思うんですが、日本の国力が落ちてきて、東アジアの国際関係が厳しくなってきているので、安全保障関係の仕事っていうのはやりがいがあるし、学生さん達の志望者もものすごく多いわけなんですよ。ただ同時に、2,3年前に公共のイベントでNSSの中で中心的に働いていた外務省の方を呼んだ講演会があったんですけれども、NSSには、霞が関改革っていう、要は安全保障マインドを各省庁で共有したいという考えがあるそうなんです。だから、あえて国土交通省とか、あまり関係がなさそうな役所のキャリア官僚もロジ担当などでNSSに入れているんですね。そこで安全保障マインドを持った人が、安全保障に関連した政策を実施することで、色々変わる部分が出てくるんですよね。例えば国交省は、インフラ輸出とかいろんな安全保障にかかわる案件がある。NSSができて、各省庁の間で安全保障という意識が共有できるようになってきたのが大きいという風に、その方はおっしゃっていました。

だから例えば、安全保障に興味がある学生さんは、防衛省か外務省に絶対行きたいって言うんですけれども、すごく狭き門だし、人気があるから結構大変なんです。でも安全保障に関わろうと思ったら、実は他の省庁でも関わっている役所っていうのはすごくたくさんあるし、政府系金融機関とか、JICAとか、公的セクターでも安全保障の役に立っている機関はたくさんあるんですね。だから、就職活動をする時に、自分なりの志望を強く持つということは大事なんですけど、一方であまり狭く自分の進路を取りすぎると失敗しちゃう可能性もあって、自分の関心とか力を活かせる分野・組織っていうのは、実は他にも沢山あるかもしれないっていう風に、ちょっと視野を広く構える方が就職活動もうまくいくのかなと思います。

学生へのアドバイス

—最後に公共の学生に向けて、コロナ禍の就職活動をする上で、何か応援のメッセージがあればお願いします。

コロナ禍で本当に就職活動も大変だったと思うんですが、公務員試験の合格者に関してはむしろ増えているんですね。霞ケ関の側で、京大の公共政策大学院に対する期待はすごく高いようです。対面での面接の機会が減っている中で、京大の公共にいる学生だったら大丈夫だろうっていう意識が、多分あるんだと思うんですよね。国家公務員合格者は去年も今年も二桁ですよね。3年前と比べるとかなり多いと思います。だから、京大に対する信頼であり、それだけ期

（3）2014年1月に国家安全保障会議の事務局として内閣官房に設置された。国家安全保障会議を恒常的にサポートする組織で、内閣官房の総合調整権限を用い、国家安全保障に関する外交・防衛政策の基本方針・重要事項に関する企画立案・総合調整に専従する。また、緊急事態が発生した際には、国家安全保障に関する外交・防衛政策の観点から必要に応じて提言する。

待されていると思いますので、自信を持って頑張って欲しいなと思います。必ずしも第一志望のところに決まらなかった学生でも、就職活動をしていく中で、自分探しをし、自分が知らなかった組織とか就職先のことを考え、最終的には、納得して第一志望ではないところに行き、そこで自分なりの活躍の場を見つけている先輩がたくさんいます。なので、就職活動中は本当に大変だし、コンペティティブな職場を目指す結果、第一志望じゃないところに行く人が出てくるのは仕方がないのですが、先ほど言ったように、視野を広く構えて、自分の能力が活かせるのはここだけだと決めてかからず、就職活動中に、いろんなものを見つけ、学び、自分を変え、広いスタンスで頑張ってもらえたらいいなと思っています。

奈良岡 聰智
ならおか そうち

現職　京都大学公共政策大学院教授
１９７５年（昭50）青森県生まれ。京都大学大学院法学研究科博士後期課程修了。博士（法学）。京都大学法学研究科准教授、教授を経て、２０１９年（平31）より現職。専門は日本政治外交史。戦前期の二大政党制、第一次世界大戦期の日本外交、政治家の邸宅などについて研究を進めている。